

白糠の アイヌ語地名

第5回

○茶路(チャロ)川

茶路川は、足寄町との境付近から太平洋へと流れる、長さ(流路延長)71・4^{キロメートル}、流域面積353・7^{平方キロメートル}の本町で一番大きな川です。

「チャロ」は「くの口」という意味のアイヌ語で、茶路川が古くから十勝の内陸、さらには、網走へ通じる交通路の役割を果たしていたことから、その「入り口」ということで名がつき「川口」と訳されています。

茶路川が内陸との交通路であったことについて、白糠村時代の歌人・郷土史家小助川濱雄は、著書の『[※]釧路国蝦夷時代史』で「白糠網走間の山道は、はじめ網走川をさかのぼり、釧路、北見国境を越え陸別川に沿って下り、足寄を経て白糠郡の茶路川の上流に出で、ここより二十里の流域に沿って白糠に出づる道なり(一部略)」として、その沿道の地名(アイヌ語



茶路川の河口

地名)も詳しく記しています。

また、茶路川が二股でわかれ左股へ向かうルークシチャロ(川)が「茶路川に沿って道が通じている」という意味のアイヌ語地名であることから道の存在を知ることがができます。

※『釧路国蝦夷時代史』は1932年(昭和7年)に小助川濱雄が著したもので、書籍として1

980年(昭和55年)に白糠町が発行しました

◆茶路川の奇談

茶路川はなかなか水の多い大川であるが、どうかすると急に水の量が減って、川口近くの中央に砂利の中州が現れる。

水流が二つに分かれ、ちょうど仰向けに両足を開いて寝た男の人のふんどしが見える格好なので、これをその地のアイヌは「ペツ・プト・チョキ・コロ」と言った。その意味は、ペツ(川)、プト(川口)、チョキ(ふんどし)、コロ(持つ)で、「川口がふんどしをかいて(して)いる」という意味になる。これが現れるとコタン(集落)に必ず不慮の溺死者が出るというて恐れて、警戒したものである。

これは、川の中州が死者の亡霊が集まる場になるので、そのときうっかり川のほとりを通りかかった者が、運悪くそれにぶつかると、川に引き込まれるのだという。

〔矢石清太郎談、市立釧路図書館報『読書人』掲載「釧路地方の伝説」(佐藤直太郎)から引用〕

◆茶路川の風物：『ししやも祭』毎年11月、白糠橋近くの茶路川

河畔では、アイヌ伝承儀式「ししやも祭(安全操業・豊漁祈願祭)」(北海道アイヌ協会白糠支部主催)が行われます。

この儀式は、アイヌの人たちに伝わる「ししやも伝説」に由来するもので、茶路川筋にあるキナチヤウシナイのススウシナイ(柳・ある・川)がその舞台です。

伝説は、昔、食べ物がまったくとれなかったとき、コタンの人たちがススウシナイの老夫婦の家でカムイノミ(神への祈り)をしたところ、川の流れに逆らって、柳の葉といっしょに真っ黒に群がる小魚がのぼってきた。老夫婦は思わず「スス・ハム・チェプ(柳・葉・魚)」と叫び、その魚がコタンを救ったというものです。



安全操業と豊漁を祈願する『ししやも祭』が茶路川河畔で行われる